

# 「郷土芸術賞」に輝く

五十年年度新郷土芸術賞の受賞者が決まった。いずれも郷土の芸術振興のため、積極的な発表活動と後進の育成につとめ、芸の深奥の追求にたゆまぬ努力を重ねている人ばかり。展示部門では一貫して「牛」を描き続け独得の世界を築く柳悟さん。ステージ部門ではピアノを通してベートーベンに迫るいっぽう連弾の魅力。情緒を舞台いっぱいに繰り広げ旺盛な創作、発表活動を続けるバレエの矢野恒さんと多彩な顔ぶれた。二十九日の贈呈式を前にそれぞれの業績とプロフィールを紹介する。(順不同)

## 受賞者の横顔

荒谷 宏さん  
(音楽)

釧路二年、十三歳の時、友人宅

で聞いたベートーベンのバイオリンソナタ「グロイツェルソナタ」が音楽との出会いだった。レコーダを借りてきて日曜日の日に蓄音機を回しては一日中、聞き回った。「音楽に魅せられてしまった

# ピアノノ連弾に情熱

んですね」という。ピアノを本格的に弾くようになったのは釧路高等学校(現湖陵高等学校)一年の時。釧路の音楽の資

の親でもある瀬戸山雪子さんに師事した。「当時はピアノというのに世話になった」と当時を思い出

た。朝は五時に城山小へ行き、学校が終わってから夜は十一時まで

の練習が繰り返された。母校の日進小、そして城山小での練習が繰り返された。

父親の反対を押し切って武蔵野音楽大学器楽科へ。「ピアノは叩くと音が出る。たれでも単純にそれでピアノが弾けると思っ

た」という。父親の反対を押し切って武蔵野音楽大学器楽科へ。「ピアノは叩くと音が出る。たれでも単純にそれでピアノが弾けると思っ



<1>

の練習では小学生の時担任だった梶原武さん(現釧路市教育委員)が「自分がピアノの練習をしていくことにして借りるから」と

冬には凍傷になるので軍手の指先だけを切り、それをはいて練習した。「毎日四時間の睡眠だった

まう。しかし弾く人、奏法によって音色は違う」「ピアノは打楽器で、アンサンブルを苦手とする

## ベートーベンと運命の出会い

「これからは瀬戸山先生の音楽に対する情熱を受け継ぎ、郷土の音楽芸術の向上に努めたい」と意欲的に語っている。

昭和三十一年、武蔵野音楽大学器楽科(ピアノ専攻)卒業。第一回道東都市交響音楽会、オムニバス・コンサートなど数多くのコンサートに出演、ディスク・シエル・ピアノを四十六年に結成、五回に及ぶ連弾、二台による演奏会、さらに国際的に活躍している